

ハーマン・メルヴィルの日本

加藤 眞 吾

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の『白鯨』 (*Moby-Dick or, The Whale*, 1851) には、“Japan” が 10 回、“Japanese” が 10 回、他に “Japans”、“Nippon” が各々 1 回使われている。¹⁾ 物語の中で、エイハブ船長がモービー・ディックを追って、北太平洋の日本近海までやって来て、そこで三日間に亘る死闘を演じた事実を考えあわせると、何ら不思議なことではないし、又当時の 19 世紀中葉には、「ジャパン・グラウンド」と呼ばれた、抹香鯨の好漁場が日本近海に複数存在し、²⁾ 多くのアメリカの捕鯨船がそこで操業していたという、この作品の歴史的背景に鑑みても、これは自然なことと思われる。しかし、メルヴィル自身は日本に関心を抱いていたのであろうか。“Japan” や “Japanese” という語が多く見つかるからといって、メルヴィルの日本についての関心が格別に深かったと言ってもよいのであろうか。「メルヴィルと日本」というテーマを考える手がかりとして、『白鯨』に於ける〈日本〉のもつ意味を考えてみたいと思う。

「メルヴィルと日本」という観点から、この問題に関して比較的早く興味深い指摘をした論文がある。

まず船長 Ahab の乗っている船は Pequod 号であるが、その船が日本の海 —— impenetrable Japans —— に近づいてくると何かしら摩^{ママ}迦

不思議な事が起ってくるのである。³⁾

同種の指摘は、ごく最近筆者が目にした文献の中にも見ることができる。

メルヴィルの暗澹たる傑作の、その筋書きと象徴主義において顕著に現れるのは、他のどこでもない、モービー・ディック（白鯨の名前）の好む避難域、すなわち日本の領海である。⁴⁾

メルヴィル自身の日本に対する実際の興味はともかく、ここでは『白鯨』における〈日本〉のもつ意味を探ってみたい。

『白鯨』は、復讐心かられたエイハブ船長が、モービー・ディックを追って、日本沖にまでやってくるという物語ゆえに、先程も触れたように、日本に対する言及が多くなるのも当然ではある。しかし、この問題を詳細に分析しているライジングとクヴィデラ（以下、ライジングと略す）によると、『白鯨』において日本への言及が多いのは、偶然でも何でもなく、メルヴィルはある目的のために、日本という語を実に効果的に用いており、たとえば、New Bedford が、イシュメイルを放浪の旅に駆りたてた “the coldness of the Western civilization” の暗喩であり、Tahiti が、人生という荒海に取り囲まれた安息の地の暗喩であるように、『白鯨』に登場する地名には注意を払う必要がある。とりわけ〈日本〉には。そして、イシュメイルが日本に言及する時、そこには読者に「神秘と破滅」（“the mystery and doom”）の思いを抱かせるメルヴィルの意図が窺われると言う。⁵⁾

イシュメイルの逃避行には運命の船、ピーコッド号に乗り組む以前から、暗い影が投げかけられている。第7章で彼は、捕鯨船員のための礼拝に参加し、そこで海で命を落とした船乗りのために奉納された、石版の碑文を目にする。その中の一つは次のようなものであった。

SACRED
TO THE MEMORY OF
the late
CAPTAIN EZEKIEL HARDY,
who in the bows of his boat was killed by a
Sperm Whale on the coast of Japan,
*August 3rd, 1833.*⁶⁾

これは、M. ブリッシュの指摘を待つまでもなく、エイハブ船長の末路を暗示している。⁷⁾ ライジングは、さらにイシュメイルが目にした他の二つの碑文に比べて、この碑文の特異性に注目する。⁸⁾ 他の碑文が、死因をぼかした表現にしているのに対し、三つ目の碑文の表現はあまりにも具体的である。

ピーコッド号はかつて航海中に三本もマストを失うという災害に遭遇したことがあった。その場所とは、日本沿岸。その原因は、悪名高い日本の「台風」⁹⁾ である。ピーコッド号の大株主の一人、ビルダド船長がピーレグ船長に次のように語る。

‘Peleg! Peleg!’ said Bildad, lifting his eyes and hands, ‘thou thyself, as I myself, hast seen many a perilous time; thou knowest, Peleg, what it is to have the fear of death; ... Tell me, when this same *Pequod* here had her three masts overboard in that typhoon on Japan, that same voyage when thou went mate with Captain Ahab, did’st thou not think of Death and the Judgement then?’ (p. 146)

「死と最後の審判」が脳裏をかすめるほど恐ろしい台風は、ピーコッド号のマストを打ち倒したのであるが、日本沿岸で、捕鯨船を待つのは台風だけではない。

But few thoughts of Pan stirred Ahab's brain, as standing like an iron statue at his accustomed place beside the mizzen rigging, with one nostril he unthinkingly snuffed the sugary musk from the Bashee isles (in whose sweet woods mild lovers must be walking), and with the other consciously inhaled the salt breath of the new found sea; that sea in which the hated white whale must even then be swimming. Launched at length upon these almost final waters, and gliding towards the Japanese cruising-ground, the old man's purpose intensified itself. (p. 645)

要するに、ピーコッド号の三本マストを吹き飛ばした「台風」も、エイハブ船長の片脚を奪った「モービー・ディック」も共に、日本と因縁浅からぬ存在として描かれているのである。さらに、ピーコッド号が日本の海に近付くと、船倉の樽から油が漏れ出す事故が起こる。スターバックがエイハブ船長に点検作業のための船の一時停止を進言するが、船長は

'Up Burtons and break out? Now that we are nearing Japan; heave-to here for a week to tinker a parcel of old hoops?' (p. 634)

と言って耳を貸さない。そしていよいよ船が、日本の海域に入ると、再び不吉なことが起こる。その日、当番に当たった水夫が檣頭に登るや否や、海へ落下したのだ。救命ブイが投げられたが、二度とその水夫は浮かびあがってこなかった。

And thus the first man of the *Pequod* that mounted the mast to look out for the white whale, on the white whale's own peculiar ground; that man was swallowed up in the deep. But few, perhaps, thought of that at the time. Indeed, in some sort, they were not grieved at this event, at least as a portent; for they regarded it, not as a foreshadowing of evil in the future, but as the fulfilment of an evil already presaged. (p. 693)

この引用には〈日本〉は出てこないが、ライジングも指摘しているように“the white whale's own peculiar ground”は勿論“the Japanese grounds”のことである。¹⁰⁾日本こそは、ピーコッド号に乗り組んだ者たちにとって吉凶であり、又実際彼らに危害を与えるものであった。

メルヴィルは〈日本〉を持ち出すことによって、ピーコッド号の未来に不吉な影を投げかけたが、その一方で日本に対し神秘性を附与している。

この時代、日本は堅く門戸を閉ざしていたので、この作品の中で日本は文字通り“that double-bolted land, Japan” (p. 169) とか、“locked Japan” (p. 681) などと表現されている訳だが、実際アメリカの捕鯨船にとっては、薪水、食糧、その他の欠乏品の補給を日本で出来ないことは深刻な問題であったし、又太平洋横断郵船航路構想を抱いていたアメリカ政府にとって、いやそれ以上に当時のアメリカ人に「あの遠い国が、これ以上鎖国を続けることは、すでに近代世界の利益と相いれないのだ」¹¹⁾ という信念を抱かせた「明白な運命」が世論を支配していたゆえに、頑なな姿勢（難破した船舶の漂流民が、日本で野蛮な扱いを受けたり、不法に軟禁されているとの誤った報道が本国でなされたりした）をとり続けていた日本は、彼らにとって“remote” (p. 596) であり“unknown” (p. 645) であり、かつ又“impenetrable” (p. 645) な存在であった。しかし、未知なる存在は〈不安〉と同時に〈興味〉も抱かせる。

メルヴィルにとって、特別のこだわりがあった太平洋にピーコード号が入った時、イシュメイルが語る独白に耳を傾けてみよう。

It [this serene Pacific] rolls the mid-most waters of the world, the Indian Ocean and Atlantic being but its arms. The same waves wash the moles of the new-built Californian towns, but yesterday planted by the recentest race of men, and lave the faded but still gorgeous skirts of Asiatic lands, older than Abraham; while all between float milky-ways of coral isles, and low-lying, endless, unknown Archipelagoes, and impenetrable Japans. (p. 645)

米墨戦争により広大な西海岸を入手した、新興国アメリカ。そのアメリカに新たに対峙する、神秘なる東洋を代表する日本（列島）が抒情的に語られる。ライジングは“unknown”、“impenetrable”、“milky-ways”という語に注目せよという。日本は“all remote and all unreachable”な存在として描かれている。¹²⁾手の届かぬ、遠い未知の国ゆえわれわれは、それを神格化しがちである。モービー・ディックを探し求めて、ピーコード号が日本の海域に入ったある日のことは次のように描写される。

Now, in that Japanese sea, the days in summer are as freshets of effulgences. That unblinkingly vivid Japanese sun seems the blazing focus of the glassy ocean's immeasurable burning-glass. The sky looks lacquered; clouds there are none; the horizon floats; and this nakedness of unrelieved radiance is as the insufferable splendours of God's throne. Well that Ahab's quadrant was furnished with coloured glasses, through which to take sight of that solar fire. So, swinging his seated form to

the roll of the ship, and with his astrological-looking instrument placed to his eye, he remained in that posture for some moments to catch the precise instant when the sun should gain its precise meridian. Meantime while his whole attention was absorbed, the Parsee was kneeling beneath on the ship's deck, and with face thrown up like Ahab's, was eyeing the same sun with him; only the lids of his eyes half hooded their orbs, and his wild face was subdued to an earthly passionlessness. (pp. 663 – 664)

少々長い引用になったが、光に満ちあふれた文章ではないか。“lacquered”は、日本の伝統工芸、漆器を連想させる語であるが、何よりも船上で太陽を凝視するエイハブ船長とフェダラー——一方は四分儀を通して、他方は裸眼で——の姿は、モービー・ディックの泳ぐ、日出づる国、日本を目指す二人の姿を強調している。¹³⁾ エイハブ船長が密かに船に乗り組ませている火教徒は出自は不明であるが、アメリカの捕鯨船に拾われる漂流民の一人であるかのように、イシュメイルによって次のように語られる。

Besides, now and then such unaccountable odds and ends of strange nations come up from the unknown nooks and ash-holes of the earth to man these floating outlaws of whalers; and the ships themselves often pick up such queer castaway creatures found tossing about the open sea on planks, bits of wreck, oars, whale-boats, canoes, blown-off Japanese junks, and what not; that Beelzebub himself might climb up the side and step down into the cabin to chat with the captain, and it would not create any unsubduable excitement in the forecabin. (p. 324)

これではフェダラーの出自が日本であると言わんばかりである。旧約の悪魔を引き合いに出してまで、神秘性を強調している。イシュメイルは、フェダラーが生まれたと思しき日本を、未だ原始性を失わぬ東洋の〈神秘〉として語る。

He [Fedallah] was such a creature as civilised, domestic people in the temperate zone only see in their dreams, and that but dimly; but the like of whom now and then glide among the unchanging Asiatic communities, especially the Oriental isles to the east of the continent—those insulated, immemorial, unalterable countries, which even in these modern days still preserve much of the ghostly aboriginalness of earth's primal generations,... (p. 325)

文明国の人間が、夢の中でしか出会うことのできない者、フェダラー。この拝火教徒と“insulated”で“immemorial”で“unalterable”な日本を結ぶ糸を辿ると、われわれはどこへ導かれるのであろうか。ピーコッド号が大西洋はカロール漁場を航行していた時のこと、その拝火教徒は深夜鯨が潮を吹くの見つけ、大声で叫ぶ。しかし、それは他の誰の目にも留まらない。

Mysteriously jetted into the clear moonlight, or starlight, as the case might be; disappearing again for one whole day, or two days, or three; and somehow seeming at every distinct repetition to be advancing still further and further in our van, this solitary jet seemed for ever alluring us on.

Nor with the immemorial superstition of their race, and in accordance with the preternaturalness, as it seemed, which in many things invested

the *Pequod*, were there wanting some of the seamen who swore that whenever and wherever descried; at however remote times, or in however far apart latitudes and longitudes, that unbearable spout was cast by one selfsame whale; and that whale, Moby-Dick. For a time, there reigned, too, a sense of peculiar dread at this flitting apparition, as if it were treacherously beckoning us on and on, in order that the monster might turn round upon us, and rend us at last in the remotest and most savage seas. (pp. 327 – 328)

月明かりに照らし出された、白銀の水面に浮かぶ不思議な潮吹き。それが、彼のフェダラーの目にしか入らぬという事実には不可思議な水の輪のもつ神秘性がいや増す。イシュメイルはさり気なく、それがモービー・ディックが吹いた潮であると暗示するのだが、その潮吹きに魅入られたかのようにしてピーコッド号が向かうのは、モービー・ディックの待つ“the remotest and most savage seas” 即ち、日本の海である。¹⁴⁾ エイハブ船長は、神代の国から来たと思しき、神秘のベールに包まれた拝火教徒の助けを得て、一切の存在の謎を象徴するモービー・ディックの棲む「最果ての未知なる海」へと向かう。その結果、イシュメイルを除いて、ピーコッド号に乗り組んだ者たちはすべて海の藻屑となる。

こうして、〈日本〉に注目すると、この作品の、〈神秘〉を究明しようとするれば、そこには〈危険〉が伴うという構図が見えてくる。イシュメイルは、世界を見たいと願った。¹⁵⁾ エイハブは、この世界を知ろしめす存在に一撃を加えたいと願った。イシュメイルの想いは〈海〉に投影され、エイハブの執念は〈モービー・ディック〉に投影される。海もモービー・ディックも共に神秘なる存在である。メルヴィルは自らの分身が求める〈神秘〉の在処を日本に置いた。モービー・ディックに導かれて海を渡ってきた二

人の分身は、日本に近づきすぎたのである。イシュメイルの探求は、鯨学という地上の学問で終わったが、エイハブは不可知の雲を取り払おうとした。それが二人の生死を分けた。ゆめゆめ〈神秘〉に近づきすぎること勿れ。メルヴィルのこのような声が、この物語のそこかしこから聞こえてこないだろうか。

Why did the Greeks give it [the sea] a separate deity, and own brother of Jove? Surely all this is not without meaning. And still deeper the meaning of that story of Narcissus, who because he could not grasp the tormenting, mild image he saw in the fountain, plunged into it and was drowned. But that same image, we ourselves see in all rivers and oceans. It is the image of the ungraspable phantom of life; and this is the key to it all. (p. 33 – 34)

Nor is it at all prudent for the hunter to be over curious touching the precise nature of the whale spout. It will not do for him to be peering into it, and putting his face in it. (p. 507)

Look not too long in the face of the fire, O man! (p. 572)

メルヴィルの日本に対する関心について、このように見えてくると、日本は神秘的な存在、いや触れてはならない〈神秘〉として捉えられていることが分る。この意味で、〈日本〉は神秘性を表すレトリックの一つとして使われている訳で、メルヴィル自身の日本に対する関心が、特別深かったということにはならないだろう。

注

- 1) 次のコンコーダンスを利用した。Henning Cohen and James Cahalan, ed., *A Concordance to Melville's Moby-Dick*, 3 vols. (The Melville Society, 1978). Eugene F. Irey, comp. and ed. *Moby-Dick Index Concordance* (New York: Hendricks House, 1978). 尚、The Princeton Text Archives の資料の提供を、藤谷聖和先生より受けた。この場を借りて御礼申し上げます。
- 2) 大隅清治「黒船来航当時の日本近海捕鯨の日米比較」『シンポジウム「何が日本を開国させたか？」開催の記録』（日本鯨類研究所、2004）, pp. 30 - 31.
- 3) 谷萩弘道「Herman Melville の神秘性と日本」『米英文学論叢』創刊号（大正大学米英文学会、1970）, p. 23.
- 4) クリストファー・ベンフィー、大橋悦子訳『グレイト・ウエイヴ 日本とアメリカの求めたもの』（小学館、2007）, p. 47.
- 5) Russell Reising and Peter J. Kvidera, “Fast Fish and Raw Fish: *Moby-Dick*, Japan, and Melville’s Thematics of Geography,” *The New England Quarterly* (June 1997), pp. 285 - 286.
- 6) Herman Melville, *Moby-Dick or The Whale* (New York: Barnes & Noble, 2004), p. 74. 以下テキストからの引用はこの版によるものとする。
- 7) M.Blish, “Melville and the Sea Drifters of Japan,” *Melville Society Extracts* 76 (Feb., 1989), p. 14.
- 8) Reising and Kvidera, p. 290.
- 9) ピーコッド号の三本マストをへし折ったものが、「強風」から「台風」へ変更されていることに注意。初めてイシュメイルがピーコッド号について説明する件は次のようなものであった。“Her [the *Pequod*’s] masts—cut somewhere on the coast of Japan, where her original ones were lost overboard in a gale—her masts stood stiffly up like the spines of the three old kings of Cologne.” (p. 118) 尚、ブリッシュは“4 large cedar poles / to replace storm-battered masts” の提供を幕府から受けたアメリカの捕鯨船があったことを紹介している (Blish, pp. 14 - 15.)。
- 10) Reising and Kvidera, p. 291.
- 11) フォスター・リーア・ダレス、辰巳光世訳『さむらいとヤンキー—日米

交渉秘史—』(読売新聞社、1969), p. 82.

12) Reising and Kvidera, p. 292.

13) Reising and Kvidera, pp. 287 – 288.

14) Reising and Kvidera, p. 297.

15) ‘Well, sir, I want to see what whaling is. I want to see the world.’ (p. 121)